

社長 復 帰

度重なる手術をし、主治医から五十五歳まで生きられないと言われていたので、その年で社長を辞め、その後は自分自身の時間を家内と一緒に過ごしたい

私の履歴書

江 頭 匡 一
え がし ら きょう いち

28

長を譲って会長となり、三年後に代表権を返上した。

このようなことを事業家としてきちんと実行していくことが、男の美学と考えていた。年を重ねると体力、知力、判断力が衰えてくる。何より怖いのは、どんなによい過去を過ごしてきても六十五歳を過ぎると、私心が出てきて、会社にマイナスになる現実を多く見てきたからだ。老害は怖いと思う。

経営再建を陣頭指揮

創業の精神守る責任感じ

幹部数十人に聞いてみた。彼らの大半は七〇―八〇%という。四〇―五〇%と見ていた私は、そのギャップに危機感を覚えた。社長を退いてから創業者としての心と役割をさぼっていることにも気がついた。やっつけてはならないことだが、今ここで改革の陣頭指揮をとれるのは自分しかないと思ったのだ。

だから、「いいよ、あなた方がそうしたいと思うならば、責任をもってそうしなさい」とできるだけ口を挟まないようにした。りん議書も見ないようにした。それが、一線からひいた者の務めと思っただけからだ。

自ら本部長になった。このとき社長に戻ることを考え、役員に「社長は副社長、専務は常務にしたいが、いいか」と尋ねてみた。稲田直太常務(当時)を除き全員が「反対」という。それで北条社長以下を経営再構築推進本部長の傘下に置いた。一年

と心から願っていた。ところが、その五十五歳で株式上場したので、創業者としての責任上、その後十年間は続けることにした。生え抜きの後継者が育つまでのリリーフに日本興業銀行から北条忠男専務を迎えた。一九八八年、六十五歳になった日に予定通り北条氏に社

が残れる可能性について社内の

経営の立て直しの最大課題と

して取り組んだのは、社員にロイヤルの一員としての誇りを持たせることだった。お客が「店の清掃・整頓が他の店に比べて優れている。また、サービスが行き届いていて、料理がおいしい」と店をほめてくれることが、社員の誇りにつながる。



会社は、江頭匡一を創業者として、一九五〇年に設立され……」と書かれている。米国では創業者という立場で経営にかかわるのは珍しいことではない。創業者の主な役割とは、創業の精神を守っていくことだと思っ

自ら本部長に立つ(92年1月)

本文を書いて思い出すことがある。私は一九五六年六月から七三年二月まで十六年余り、日曜日でも欠かさず朝七時十分前に自分が運転する車で、当時専務だった鈴木小一郎氏を自宅まで迎えに行った。会社からの送りと合わせ往復約一時間、二人で会社の重要な意思決定事項を話し合った。

いつの間にかあいまいになっていた「ロイヤルらしさ」、企業の個性を取り戻すことだと説いた。当たり前のことだが、これができれば、お客も増え、満足いく利益も確保でき、経営再構築がかなうと考えた。

わが社の定款、第一条には「当(ロイヤル創業者取締役)